
現実の世界へようこそ

may.honda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実の世界へよつて

【著者名】

N4565BA

【作者名】

may·honda

【あらすじ】

続編は出すかどうかわかりませんが、連載としたいた方が後々楽なのでそつしています。

あらすじは「現実の世界に変な奴らがやつてきた」ってことだけです。
短い文なのでとりあえず読んでみてください。

1章（前書き）

芸術作品をお求めの方は黙つて電源のスイッチをお切りください。
小説をお求めの方で変化球がお好きな方は是非読んで行ってください
まし。

アキーバのビルの一室にあるダルイーダの水飲み場にたむろしている5人組。僕を除き4人であるが、どうみても服装がおかしい。アキーバで目立つ服装つてのは滅多にないが何かのイベントでもないと浮く服装ならいくらでもある。

「なあマスター。どつかで楽して稼げる仕事ない?」

神父の姿をした男がヒゲの生えたこの店の店長に聞いている。

「楽して稼げる仕事ならあるぜジョニー。お偉いさんの子供の体が悪くてな、ただ海外に行けるほどの体力がないんだと。それで肺を1つ欲しいんだとよ。さあどうする?」

「ほう。入院してる間にナースさんと出会えるかな? そのまま何人とも恋愛に発展しちゃつたりして、ハーレムとか」「

「たぶん、それはないぞ。公にはされないはずだろうから小さい個人病院でやるだろうし、それに手術するのは爺さんと婆さんの夫婦だ。ジョニーが望む展開にはならないと思つぜ」

「じゃあやらなーい」

ジョニーは老人夫婦しかいないとわかると断るが、その前段階で断つとけよ思つた。

「そ、そ、そんな女人の人と出会わないからって仕事を断るのってよくないと思います」

今度はピンクの衣装を着たひ弱そうな女戦士がマスターに話しかけている。だが、どつからどうみても怒る点が違うだろと思つ。

「キャサリン。たぶん、怒る点がズレてると思うぞ。臓器の売買なんてやってはいけないってのが抑えるポイントだと思つよ」

マスターは的確に僕が思つてることを口にしてくれた。そもそも

もそんな話を盛つてこようとするな、とは思つがそれを言つたところでしようがない。初めから断ることを前提にしていて、ちょっとと考へるだけでも眉唾ものだからだ。

「ねー、そこのお姉さんちょっと遊んでかない？」

そんなことを言つているのは袈裟のような衣装を着た坊主頭の男だ。

「んーそうね。どうじょうかな」

その女は少し乗る気になつてゐる。それをおだてて女の氣を引くらしい。

「ほら君つてブルドックの顔みたいで愛嬌があるじゃん」

「最低！」

そういわれ店内に響き渡るほど乾いた快音を響かせたビンタを男の頬に入つた。

容姿はいかにもハゲな武闘家は愛嬌の良さを言いたかつたらしいが、褒める言葉があきらかに違つ気がした。ちなみに彼の名前は権蔵である。

騒いでいる連中の中でマスターに話かけられる程に大人しい日本人が一人いる。その男は頭に白いターバンを巻き、とても古いマントのようなものを羽織つている。

「おいマイケル。もういつぱい飲むか？」

「自分、酒はあまり呑めないゆえ、いらぬでがんす」

おいおい、どこが酒だ。それは果汁1000%のジュースじゃないか。絶対に一桁違うと思うが商品がそう名前なのでしょうがない。

「そうかい。ほどほどにしどけよ。酒とか本氣で思つてはいるのなら、医者へ連れて行かないといけないからな。それに語尾がおかしいぞ」

やはりマスターも同じことを思つていたらしい。

そろそろ行くかと席を立とうとする。そこへ依頼が舞い込んできた。僕はその依頼を断ろうとしたが、他の4人がやる気満々である。他の4人に押し出される形で僕の反対意見は却下された。

いいかい。そこへ行くには、ここをこう行くとここに出るから、そのまま真っ直ぐ行けばたどり着くから。いつてらつしゃい。

こんな簡単な説明を地図に合わせて指示する。

「これとそれだけじゃ わからないよ」

キヤサリンが言つてきた。

「そうだよ。お前もこいよ」

「道がよくわかつてないゆえ来てくれると助かるでござる」

また語尾が変わつてると思つたが、来てほしいと言われたら行くしかないのがこのメンバーの鉄則である。

「そうだぜー、ユーが来ないと何も始まらないぜ」

こいつにだけは頼まれても絶対に動きたくない。似合つてないしかつこつけて言われたのがうざつたい。

しようがない行くぞ、と声をかけ店を出た。

人通りのある道に出るとやはり道行く人の視線が気になる。その原因の本人たちは何も感じてないらしい。

「ねーマイケル。あんな子はどうだい？ かわいくないか」

「ジヨニー、おぬしは神官ゆえ控えた方がよろしいのでは？」

「いいんだよ。女は神秘的な生き物なんだぜ。絵画とか見てみろよ。かなり官能的に描かれてるぜ。あの子なんて見てみろよ、おっぱいが程よい大きさだぜ」

あれは95%の確率でバットが入っているぞと、言つてやろうかと思つたが黙る。この手の願望を碎くのは簡単だが碎いた後に何も残らないからだ。決して、バットじゃなければいいとか思つたわけない。

「キヤサリン、おっぱい見せちゃいなよ」

チャライ大馬鹿やろうが余計なことを言い始める。

「何を言つてるんですか」

重くて引きずつっていた剣をジャイアントスイングの要領で振り回

した。

その鞘から抜かれていない剣が僕の後頭部にヒットした。重い剣なら軽い剣に代えろよ、そして俺を巻き込むな。

「『』、『』、ごめんなさい」

振り回した本人に謝られた。

「ユー、謝つていいんだから許してやれよ

お前が原因だろ、と権蔵の頭を小突く。

しばらく歩くと目的地に着き、そこは人で溢れかえっていた。どうやら僕らに敵対心を抱いているらしく、少し格闘技の経験がある連中が構えている。それもそうだ、戦士のかっここうに剣を引きづっている女。それに神官の服装に木の杖を持つているやつ、盗賊を連想させるような浮浪者のかっここうをしているやつに坊主頭で歩いていてもかっこつけていると一目でわかる男3人。

警察に通報されないのがおかしいレベルの4人組だ。

僕は少し離れている場所で見ていた。いざ、人の集まっているところに行くと恥ずかしいじやん。どうでもいいことだが、じやん、の語尾からわかるように僕は神奈川出身だ。

どうやらバトルが始まつたらしい。

大きいお友達ABCが現れた。

大きいお友達Aは見守っている。

大きいお友達Bは目を合わせないようじどこかを向いている。（じゃあ出てくんnya）

大きいお友達Cは威勢よく叫んだ。「かえれ

ジョニーは鼻をほじつた。キヤサリンは怯んだ。マイケルは聞いていなかつた。権蔵は眼中にないのかシカとした。

マイケルのターン。

大きいお友達Cから1漱石を盗んだ。

大きいお友達Cに精神的ダメージ。（パクられればショックだわな）

権蔵は挑発した。「やーい。お前ら彼女いんの?」（お前もいな
いだろボケエ）

大きいお友達ABCは憤慨した。（あーあ、権蔵もフラれてばつ
かでいないのになあ）

キヤサリンはビビって何もできない！

ジョニーのターン。

カメラを取り出して周りを撮影し始めた。
パシヤパシヤ。（あいつこんな時に集まってきた女を撮つてやが
る）

ジョニーは女から罵声を浴びせられた。

「お前なんか撮つてねーよ。豚メガネ」

追加攻撃で今度は石と罵声が飛んできた。（そりやそうだろ。怒
つて当たり前だ）

ジョニーはダメージを受けた。

大きいお友達Aのターン。

「ここはボキが守るんだな」手を広げ一人を守る。

大きいお友達Cのターン。

「いや、ここはボキが守る」一步前へ出て手を広げた。

大きいお友達Bのターン。

「じゃあボキが守るよ」

大きい友達AC

「どうぞどうぞ」

大きい友達Bが前に出てきた。

マイケルのターン。

マイケルは大きいお友達Bから5漱石を盗んだ。

大きい友達Bは泣いて逃げて行つた。（僕でも泣いて帰るわ）
権蔵のターン。

大きいお友達Cに突つかかる。

「おい、ざけんなやボケ。道開けろや」

大きいお友達Cは逃げ出した。

ジョニーのターン。

石を投げられダメージを受け集中できていない。

キャサリンのターン。

まだビクビクしていて動けない。

大きいお友達Aのターン。

「ごめんなさい」

大きいお友達Aは逃げ出した。

バトル終了。

権蔵は6漱石を手に入れた。

4人は建物の中に入つて行つた。僕もタイミングを遅らせて中に入る。そうすると階段を上りイベントスペースのような場所にたどり着くと、そこには先ほど見た大きいお友達が同じうちわを持つてたくさんいた。

あの4人がやはり係りの人には囮まれていた。耳を傾けていると何やら追い出されそうになつてゐるらしい。そりや、変な衣装を着た4人組なんてものは中に入れないので、もめごとも起こらないからイベントの運営としては楽になるだろう。

何やらジョニーは係りの人の胸を触ろうとして、ビンタを食らつてゐるようだ。そりや、囮まれて追い出されるわ。鼻の下を伸ばしてゐるし警察が来たら言い逃れできないぞ。

キャサリンはあの衣装のおかげでカメラで無断で撮られまくつていた。まー、恥ずかしがつてゐるしリアクションは間違つてないけど、あきらかに着て行く服を間違えている。

マイケルはキャサリンがかつてに撮影されていたカメラをひたすら盗んでいた。漱石に加えてカメラも盗むのか。しかも正確に撮影していたカメラだけを捕つていて。さすがだ。

権蔵はイベントに来ていた綺麗な女の子をナンパしている。やっぱりダサいくせに恰好つけているのが気に食わない。おまわりさんアソツだけですつてなれば今すぐに通報しよう。

おいおい、あの馬鹿たちがどんどん囲まれていくぞ。4人ともこつちに向けて手を振ってきた。よし他人のふりをしよう。僕は無関係ですよーと。僕は目を合わさないよう視線をそらすと警備員の人がやってきた。

やっぱりバトルが始まった。

警備員A Bが現れた。

警備員Aのターン。

警備員Aの口撃「今すぐ出て行きなさい」

ジョニーは邪魔をされ不機嫌になつた。（邪魔されて当たり前だ）キヤサリンはカメラ撮影が止まらず困っている。（うん、間違つてないよ）

マイケルは56個あつたカメラの最後をカメラを盗んでいる。（お前は本物腕前だよ）

権蔵はナンパを邪魔され警備員を睨みつけた。（帰れ、そして捕まっていこい）

警備員Bのターン。

表に引きずる。

マイケルはサラリと身をかわした。

マイケルのターン。

分身の術。回避率アップ。

権蔵のターン。

警備員Aに右ストレート。（おい、やめろ捕まるぞ。このばか）人の足に引っ掛けられた。ミス。権蔵は小さいダメージを受けた。ジョニーのターン。

コワモテの顔になり警備員Aの胸ぐらをつかむ。「おい、俺の邪魔すんな」（間違つてますよ。絶対に君は正しくない）

警備員Aは少しビビった。攻撃力ダウン。

キヤサリンのターン

キヤサリンの口撃「勝手に盗撮するのはやめてください」（うん。やっぱりアクションは間違つてないよ。でもね、盗撮は許可

を取った時点で盗撮じゃないとと思うんだ。それに……）
ミス。すでにマイケルが盗り終えていた。

警備員Aのターン。

ビビって足が動かない。応援を呼ぶ。

無線機でどこかへ呼びかけた。

警備員Bのターン。

避難指示「みんなにげてー」（具体的な指示をはよ出せー・）

「……」（出さないのかよ）

ミス。出入り口が混乱した。そして僕はガックリうなだれた。

マイケルのターン。

盗む。

警備員Aの無線機を盗んだ。

権蔵のターン。

引っ掛けられた大きいお友達に突っかかった。「何してくれとん
じやいボケエ！」

相手のカウンター。「ハセ関西弁でなに言つトンじやいアホ。し
ばくぞ」

そのまま殴られ権蔵の精神に大ダメージ。

殴られたショックで戦闘不能になつた。（あのバカ……）

ジョニーのターン。

杖を回し風を起こす。

警備員A Bを吹つ飛ばした。

そのまま女の係員の服まで吹つ飛ばした。（よくやつた！ わす
が一流の神官や）

「キャー最低！」

そのままカウンターで平手ウチを頬にくらう。アゴに入りクリテ
イカルヒット。

ジョニーは戦闘不能になつた。

警備員A Bを倒した。

バトル終了。

マイケルは無線機を手に入れた。

そのままステージの方へ歩いて行く。

そうすると次は声優Aが出てきた。

マイケルのターン。

使用済みマイクを盗んだ。

キヤサリンのターン。

奪つてきたカメラを踏みつぶす。

周りの人へ大ダメージ。田を覆つて絶望を感じている。

声優のターン。

声優は呼びかける。「みんな助けてー」

大きいお友達が一斉に前に立ちはだかる。

キヤサリンのターン。

不死鳥の尻尾を使った。

ズボンを脱がしジョニーのお尻の穴に刺す。（つてバカ！　使い

方間違つてるつて）

「そこはダメえええええ」

ジョニーは立ち上がった。（なぜ戦闘不能から治つたんだ……）

権蔵のターン。

クナイを投げる。

声優の服を少し切り裂いた。（お、ちょっとエロいぞ）

ジョニーのターン。

杖を上に掲げ声優に水を落とした。

声優の服が透けた。（アウト！　アウト！　色々とアウト！）

立ちはだかっていた大きいお友達の敵意が下がつた。

声優のターン。

泣く。「うえーーーん。誰か助けてよー」

大きいお友達の一部がこちらに近寄つてきた。

キヤサリンのターン。

「こないでこの変態！」（勝手に写真を撮られた君以外の3人の

方が変態だと思います）

引きずつっていた剣を両手で台風の中心にいるよつと振り回した。

近づいてきた大きいお友達を吹っ飛ばした。

権蔵のターン。

さらにクナイを投げつける。

盾になつていた大きいお友達のメガネにヒット。メガネが割れた。声優のターン。

「もう怒ったよ」怒りに満ちて机を投げ始めた。

4人まで距離が届かず、手前の大いにお友達たちにヒット。（倒れてる人が多くて地獄絵図のようになつてゐるぞ）生き残った大きいお友達たちは去つて行つた。

ジョニーのターン。

杖をもう一度掲げ今度は周りの女人に水をかけた。

髪と服が濡れ、服が透け艶めかしいセクシーな感じになつた。（

お前はゴッドだ。神だ！）

キヤサリンのターン。

不死鳥のムチで机の下敷きになつた大きいお友達を叩き始めた。

「エイ、エイ」とピシピシと叩く音がこだまする。

大きいお友達たちが蘇つた。

キヤサリンのことを聞くようになった。（あ、こいつらも変態だ。しかももう一回叩いてほしいとか目覚めちゃつたよ）

「コラ！ 君たち何をやつてるんだ！」

警察官 A B C D E F G がやつてきた。

警察官 A のターン。

警察官 A の口撃。

「手をあげる打つぞ！」

銃を構えた。

キヤサリンは手を挙げた。

ジョニーも手を挙げた。

マイケルはサツと隠れた。

警察官Bのターン。

警察官Bの口撃。

「確保おおおー。」

ジョニーとキヤサリンは捕まつた。

僕はおまわりさん、こいつ忘れてますよと、権蔵を指さす。

警察官は無線で呼びかけた。どうやら救急車を呼んだらしい。

チッしづとい奴め。

3

数時間後、捕まつた二人がマスターに話しかけていた。

「キヤサリンが勝手に写真を撮られたから怒つたんだって言つたら見逃してくれたよ」

ジョニーがマスターにそりやかに話した。

胸を触ろうとしたことは言わなかつたらしい。そりやそつだわな。

「嘘は良くないだろ。ジョニーのことだから係りの人の体でも触るうとしたんじやないのか？ そうだろキヤサリン」

マスターは全てわかつてゐるぞと言わんばかりの先読みをし、キヤサリンに話をふつた。

「そうですよ。ジョニーさん嘘はいけませんよ。神父様が」

「神父じやないもん。神官だもん。それに体を触らうとして何が悪い」

口をへの字に曲げてジュースを煽る。

ジョニーは神官やめるよ。その振る舞いは神に仕えぢやダメだろ

……。

「権蔵はビンタをされて倒れて救急車だっけ？ 情けないな」

マスターが今度は権蔵に話しかけた。

「いや、グーパンだよ。アゴに入つて脳が揺れちゃつてね。それで、はつきり覚えてないんだけど、誰かが警察官にこいつも捕まえてくれつて言つてた氣がするんだ。でも思い出せないんだ」

あーそれは僕だよと、一ツ口に笑い伝えようかと思つたがやめと
いた。わざわざ喧嘩になることを言つべきではないからだ。

「それでマイケルは警察に来たときには隠れたんだっけ？」

「せつしや不器用ゆえ隠れ蓑術を使つたんでごんす」

もう不器用のレベルじゃないよな？ むしろ器用なレベルだよな？

「本来なら何事もなかつたかのように振る舞うのが器用なのでござ
んす。まだまだ未熟で不器用ゆえそうするしかなかつたでごんす」

「次はごんすかい。それに最後はごんすになつてたよ」

マスターが指摘するとマイケルは、また不器用ゆえなどと言い始
めた。

「マスターこれ依頼品ゆえ渡しといてくれ」

そういうとマイケルはマスターにマイクを渡した。

その後僕たちはそれぞれ別れ家に帰り、ニュースを見るとテレビ
でアキーバの事件がニュースになつていた。

「最近、変な事件が多いわね。カメラで撮られて声優さん含めて
袋叩きにしようとしたとか。それに机を持って声優さんが暴れたらと
か、ちょっとついていけないわ」

そ、そ、そつすねと、苦笑いを浮かべるしかない。

「あんた、そういう人と付きあつたらダメよ」

僕はそういう人とは一線を引いてるからと、笑いながら答えるし
かなかつた。

まさか騒ぎを起こした本人達とつるんでいるとか今さら言えるわ
けなく、おぞらぐ墓場まで持つて行くことになるだろ？。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4565ba/>

現実の世界へようこそ

2012年1月12日12時53分発行